

自然保護推進員紹介 私の自然保護活動

水がめフォーラム会長
吉川 辰美さん

小林市内の河川の水質調査を行うと共に、自作の生物標本を用いて環境啓発活動を行っています。



貴重生物の標本で 自然環境への意識を高める

昔から虫が好きだったという吉川さん。窒素を使った標本作りの方法を発明するなど、虫に触れ親しんできました。ところが、身の回りの虫の種類や個体数がどんどん減ってきて、中には見かけなくなった虫も出てきたのだといいます。

このままではいけないと危機感を抱いた吉川さんは、虫だけでなく生物が生きていくための命の水を守るために「水がめフォーラム」を発足しました。2006年のことです。

以来、国立博物館でも採用されている独自の標本作りの技術を生かして、水質指標生物や、ほとんど見られなくなった生物など数々の標本作製。イベントなどで展示することで、自然環境の大切さを伝えていきます。

「360度あらゆる方向から観察できるのが標本のいいところ。実物を目の当たりにできるので、みなさん興味津々です。標本を見てもらうことで、これ以上かけがえのない生物を減らさないために水を大切にしなければならぬ、という意識をもってもらえれば」と吉川さん。今後は、さらに環境啓発活動に力を入れていきたいということです。



左) 地元の小学生と行った水質調査



右) 河川の水質を判定する水質指標生物の標本

マイストーン作戦

珪藻や藍藻が付きやすくするために川床の石を磨き、鮎の生息環境を良くする「マイストーン作戦」。活動を通じて、自分たちの川という意識が芽生えます。



鮎チョン掛け大会

普段は漁協組合員だけに許されている伝統漁法「チョン掛け」を体験する「鮎チョン掛け大会」。透き通った水の中を大群で泳ぐ鮎の姿は圧巻です。

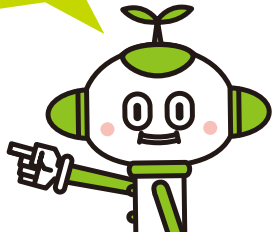


ふれあい魚釣り大会

人と人、自然と人とのふれあいを目指して行われる「ふれあい魚釣り大会」。「きれいな水だからこそ、たくさんの人たちが集まってくるんですよ」と長瀬さん。



長瀬さんが行っているイベントを紹介する人ダマ



長瀬 一己さん

「北川の水の美しさを体感してみてください」

「魚釣り大会やつかみ取り大会など、きれいな川で1日たっぷり遊ぶことで、水の大切さが身をもってわかるんです。それがとても大切なんです。話や文章で知ると、自分で経験するのでは理解の度合がまったく違いますからね。」
毎年11月に行われる「ふれあい魚釣り大会」には遠くは福岡からの参加者もあり、1000名以上の人が北川の水の美しさに感動して帰って行くのだそうです。
「私がイベントを行うのは、来てくれた人に、自分の地元の川をきれいにしようという思いを広げたいからです。きれいな川で楽しい体験をしてもらい、水がい



山太郎ガニ

豊かな水の中で大きく育った山太郎ガニ。北川にはこの他にもさまざまな生き物が暮らしています



水源の森看板

水を守る森に設置されている看板。「私たちは自然の一部であり、自然によって生かされているということを忘れてはならない」という一文が

かに貴重なものなのに気付いてもらおう。そしてその水を守るために、自分に何ができるのかを考えてもらえればと思っています。」

身をもって水の大切さを知る

流域の雑木林の力で豊かな水が流れる北川。長瀬さんは、この清流に親しんでもらうことで水のありがたみを知ってもらいたいと、さまざまなイベントを開催しています。

なぜ雑木林が豊かな水をつくるのか。長瀬さんはその理由をこう語ります。
「雑木林を構成しているさまざまな樹木は、地中深くまで根を張り、土砂の流出を抑え濁水を防ぎます。また、落とされた葉っぱは腐葉土となり、そこを通る雨水は

中でも全国的に注目を集めているのが、「水を守る森を残そうかい」を合い言葉に行っている活動です。この活動、北川流域にある、樹齢30年以上の雑木林を地権者から借り受けて、伐採することなく保全し、北川の水源となる森を構築しようとするものです。
「鮎があちこちで少なくなったという話を聞きますが、北川にはたくさん鮎がいるんですよ」と話すのは、北川漁業協同組合の長瀬一己組合長。「豊かな水をつくる」という目標を掲げ、さまざまな活動を行っています。

豊かな水源を守る

真つ青な空をそのまま映し出しているかのように青く輝く水面。驚くほどに透明な流れの中を、魚の群れが優雅に泳いでいます。
「鮎があちこちで少なくなったという話を聞きますが、北川にはたくさん鮎がいるんですよ」と話すのは、北川漁業協同組合の長瀬一己組合長。「豊かな水をつくる」という目標を掲げ、さまざまな活動を行っています。

人が手を入れずに山を守る

「例えば、1000年のカヤノキを作ろうとしたとき、植樹から行くと1000年掛かります。しかし500年経ったカヤノキを切らずにそのまま残せば、その期間が500年で済むわけです。」

雑木林も同じで、1000年の森を残そうと考えるわけですから30〜50年の雑木林を借り上げて伐採しないようにすれば、残りの時間で1000年の森ができるじゃないですか。

また、植林から考えると植樹して、その後は苗木をシカの食害から守るための対策、巻き付いた蔓(つる)の切りなど、ある程度の時期までは人手が必要となり、かなりの経費を確保しなければなりません。北川漁協では、そんなお金がないのでシカの食害の心配も無く、蔓(つる)が巻き付いても問題のない30〜50年生の雑木林を借り上げたら効果的ではないかと考え、今ある雑木林を活用することで、時間や手間をかけず、より効率的に自然の循環サイクルに役立つ豊かな森林を残していくことを実践しています。」

北川「水を守る森を残そうかい」

ありのままの雑木林が育む 青き清流

県内各地の
自然保護活動を紹介

